現場に役立つ日本語教育研究 2

# ニーズを踏まえた語彙シラバス

シリーズ監修 山内博之 編者 森篤嗣

Kurosio
くろしお出版

現場に役立つ日本語教育研究 2

# ニーズを踏まえた語彙シラバス

シリーズ監修 山内博之　編者 森篤嗣

Kurosio
くろしお出版

# CONTENTS

現場に役立つ日本語教育研究２　目次

まえがき　森篤嗣　iii

## 第一部　アプローチ別語彙シラバス論

第1章 初級総合教科書から見た語彙シラバス（田中祐輔）……3

第2章 話題から見た語彙シラバス（橋本直幸）……33

第3章 コーパス出現頻度から見た語彙シラバス（松下達彦）……53

第4章 語彙密度から見た語彙シラバス（佐野大樹）……79

第5章 日本語学習者から見た語彙シラバス（劉志偉）……95

第6章 日本語教師から見た語彙シラバス（渡部倫子）……115

## 第二部　ニーズ別語彙シラバス論

第7章 理工系留学生のための文字・語彙シラバス（松田真希子）139

第8章 日本語教育専攻大学院留学生のための語彙シラバス（石黒圭）……159

第9章 子どもを持つ外国人のための語彙シラバス（森篤嗣）……179

第10章 就労者のための語彙シラバス（岩田一成・菊岡由夏）……197

第11章 外国人看護師のための語彙シラバス（嶋ちはる）……213

第12章 外国につながる子どもたちのための語彙シラバス（中石ゆうこ・建石始）……231

あとがき　山内博之　253

執筆者紹介　257

# まえがき

森　篤嗣

## 1. はじめに

本書は、「語彙シラバス」というものをどのように考えるべきかについて、多角的かつニーズ別に検討した論文集である。

本書の書名は『ニーズを踏まえた語彙シラバス』である。しかし、「文法シラバス」に比べると「語彙シラバス」という語は聞き慣れないかもしれない。そこで、ここではまず語彙シラバスという語の考え方について述べ、続けて「ニーズを踏まえた」という看板を掲げるに至った理由を述べたい。

まず、日本語に限らず言語の習得においては、語彙力が極めて重要であることは理論的にも経験的にもよく知られている。例えば、本書に収録されている第3章の松下論文によれば、読解における語彙力の占める割合は、日本語で40～55%程度（Koda 1989、小森・三國・近藤 2004、野口 2008）にものぼると述べている。また、経験的にも口頭テストなどで、「文法がうまい人より語彙の豊富な人の方に高い評価を与えたくなる」というようなことも、日本語教師としてよくあるのではないだろうか。

では、なぜ文法シラバスはよく知られているにもかかわらず、これだけ重要であると考えられる語彙シラバスは聞き慣れないのだろうか。それは、「できることからやる」という実現性の問題が大きかったと思われる。教材を作成する場合、構造シラバスであれば、本来は文型だけでなく語も構造的

に組まれるべきであるし、場面シラバスや話題シラバスであっても、場面や話題に適切な語を計画的に提示するべきである。もちろん、語の提示により、各課の単語リストはできるにしても、それは本当に語彙シラバスなのだろうか、場当たり的な単語リストに終わっていないだろうか。この問題については、本書収録の第1章田中論文で確認して欲しい。

語彙シラバスとは、言語の習得に必要な語を、理念やニーズに基づいて配列し、学習者に提示するためのものである。文法シラバスと同じく、学習者の言語習得を円滑にするために順序よく作成され、計画的に提示されるものでなくてはならず、教材における語の提示はたまたま出てきたものであってはならない。電子的に利用可能なコーパスが整備され、研究者がそれぞれ取得したデータも形態素解析など、自然言語処理研究による技術で整備可能になってきた現在、語彙シラバスに関する研究は実現可能となってきた。今こそ、文法シラバスを見直すだけではなく、新たに「データに基づく」語彙シラバスに着手する好機である。

したがって、本書ではデータに基づいた語彙シラバスを検討するために、まずは、「第一部　アプローチ別語彙シラバス論」で、多角的に語彙シラバスのあり方を検討する。ただし、第一部全てがニーズを考慮しない一般的な日本語学習者を想定した語彙シラバス論というわけではない。松下論文、佐野論文は、BCCWJという均衡コーパスを用いながらも、例えばアカデミックライティングを必要とする日本語学習者なども視野に入れている。そして、劉論文は超級を目指す日本語学習者、渡部論文は年少者（外国につながる子ども）が主たる対象となっている。語彙シラバスを検討するということは、文法シラバス以上に、一般性よりも個別性を志向することになる。なぜなら、語は文法よりもはるかにバリエーションが多く、ニーズによって必要とする語彙が異なるからである。その意味では、第一部もアプローチ別を謳いながら、常に「ニーズを踏まえた」語彙シラバスをにらんでいるのである。

そして、「第二部　ニーズ別語彙シラバス論」は、本書の書名でもある「ニーズを踏まえた」を純粋に対象としたものである。6本の論文全てに共通するのは、ニーズ別語彙シラバスを検討するために、独自のコーパスを構

築し、その語彙の特徴を分析している点である。文法シラバスであれば文型、その他のシラバスでも場面や話題を優先し、「教材ありきで単語リストができる」という付随的語彙学習ではなく、「ニーズ別語彙シラバスがあって教材を作る」という計画的語彙学習を願って書かれた論文ばかりである。

書籍という媒体の都合上、全データを論文に収録することはかなわなかったが、第二部だけではなく第一部も含め、本書に収録した論文のデータは可能な限り、下記のアドレスで公開している。

http://www.9640.jp/genba/

「ニーズ別語彙シラバスがあって教材を作る」という理念を実行するための足がかりにしていただければ、本書の編者として本望である。

## 2. 本書の構成

本書には、以下の12本の論文が掲載されている。**3.** では、この順に各論文について、簡単に解説していく。

第一部　アプローチ別語彙シラバス論

第1章：初級総合教科書から見た語彙シラバス（田中祐輔）

第2章：話題から見た語彙シラバス（橋本直幸）

第3章：コーパス出現頻度から見た語彙シラバス（松下達彦）

第4章：語彙密度から見た語彙シラバス（佐野大樹）

第5章：日本語学習者から見た語彙シラバス（劉志偉）

第6章：日本語教師から見た語彙シラバス（渡部倫子）

第二部　ニーズ別語彙シラバス論

第7章：理工系留学生のための文字・語彙シラバス（松田真希子）

第8章：日本語教育専攻大学院留学生のための語彙シラバス（石黒圭）

第9章：子どもを持つ外国人のための語彙シラバス（森篤嗣）

第10章：就労者のための語彙シラバス（岩田一成・菊岡由夏）

第11章：外国人看護師のための語彙シラバス（嶋ちはる）

第12章：外国につながる子どもたちのための語彙シラバス（中石ゆうこ・建石始）

## 3. 各章の紹介

### 第一部　アプローチ別語彙シラバス論

#### 第 1 章：初級総合教科書から見た語彙シラバス（田中祐輔）

この論文では、過去から現在までの語彙シラバスの歩みに関する基礎的資料を提示することを目的とし、戦後日本において発行された初級総合教科書 21 種 34 冊の調査と考察をおこなっている。具体的には、（1）各語項目の出現頻度とその特徴、（2）全教科書に出現する語項目、（3）過半数の教科書に出現する語項目の特徴、（4）過半数の教科書で扱われている 875 項目に関する各教科書のカバー率、（5）50 年代から 00 年代それぞれの教科書特有の語項目、（6）各語項目の提出順とその特徴、（7）「（1）」と「（6）」との相関関係、について分析を行い、戦後日本語教育において、主要初級総合教科書が、いかなる語を扱ってきたかについて明らかにしている。

新しい語彙シラバスを生み出すには、既存の教材がどのような語を提示してきたかを知らなければならない。昨今、リストラやスクラップ＆ビルドという語も使われるが、研究に関しては無から有を作り出すのではなく、先人の積み上げを知り、学び、新たに積み上げていくものである。この論文は、その資料的価値もさることながら、先人に真摯に学ぶことが体現されていると言える。

#### 第 2 章：話題から見た語彙シラバス（橋本直幸）

学習者が日本語を学ぶ目的の多くは、日本語の語彙や文法などの「言語形式」を学ぶことではない。自身が望む「言語活動」を、日本語を使って達成することである。この論文では、学習者の言語活動を「話題」という枠で捉え、独自に設定した 100 の話題ごとに語彙を収録した「話題別語彙・構文リスト」（『実践日本語教育スタンダード』に掲載）を紹介している。さらに、この話題別語彙・構文リストを日本語教材へとつなげるために、「話題のネットワーク」を構築している。文法力の向上は「テキストの型」を指標に測られることが多いが、語彙力向上の指標は「扱える話題の数」である。この論文では、学習者が扱える話題を無理なく広げていけるよう、異なる話題間で共通して収録されている語の数をもとに、話題どうしの関連性を明らか